日刊工業新聞
年月日 18 08 03
ページ 10
NO.

ICT 世界の潮流 PART6 4

動きだしたインドのフィンテック㊦

安さ・速さ 普及のカギ

国際社会経済研究所（NECグループ）主幹研究員
大平 公一郎

融資は大手優先

インドでは、銀行が大手企業への融資を優先していることなどを背景に、中小企業の資金需要に対して既存の金融機関が満足に資金を提供できていない。個人向けも似たような状況にあり、借り入れをする場合、友人や親戚などに頼る人が相当な割合に上る。こうした中、オンラインレンディングを中心とした、融資分野のフィンテック（金融とITの融合）サービスも徐々に導入され始めている。

インターネット上だけで融資が完結する、代表的なオンラインレンディングサービスでは、一定程度の教育を受け、プラットフォームの仕組みを理解できる人や企業が主な顧客となっている。

パートナー仲介

一方、融資の約束はオンラインプラットフォーム上で成立させるが、実際の資金のやりとりでは借り手と貸し手の間にパートナー企業が入って仲介するモデルも存在する。小企業や低所得者が主な顧客層であり、パートナー企業が間に入ることで、情報通信技術（ICT）機器の操作に慣れない、金融インフラの利用がよくわからない、といった層にもある程度対応が可能となる。このようにインドの事情に即した、さまざまなビジネスモデルの誕生が、融資の裾野を広げようとしている。

政府はオンラインレンディングが中小企業や個人の融資調達機会を大きく増やすと考え、サポートする姿勢を打ち出す一方、事業者が架空の融資案件で資金を集めて逃げるといった詐欺事件の防止も意識している。2017年10月にはオンラインレンディングに関する規則を発表し、事業者のインド準備銀行への登録や一定額以上の資本を求めるなど、事業者の乱立に歯止めをかけている。登録事業者は、信用情報を手がける企業「Credit Information Companies」に取引データを提供することが求められている。これから融資が増えるにつれ、集積されるデータも膨大なものとなるだろう。

オンラインレンディングを手がけるSMEcorner

潜在需要大きい

インドにおける金融サービスの利用は、既存金融機関によるサービス提供範囲が限られていたこともあって、まだまだ普及していないのが実態だ。決済であれば現金による決済、融資も友人や親戚などからの借り入れがまだ多いが、一般市民や企業がそれを望んでいる訳もなく、より安全で効率のよい、かつコストが安い金融サービスに対する潜在的な需要は大きい。

13億人を超える人口を抱え、大きな経済成長が見込まれているインドだが、その発展にはフィンテックによる安くて速い金融サービスの普及が重要なカギとなりそうだ。

（金曜日に掲載）

無断転載・複写禁止 ㈱日刊工業新聞社